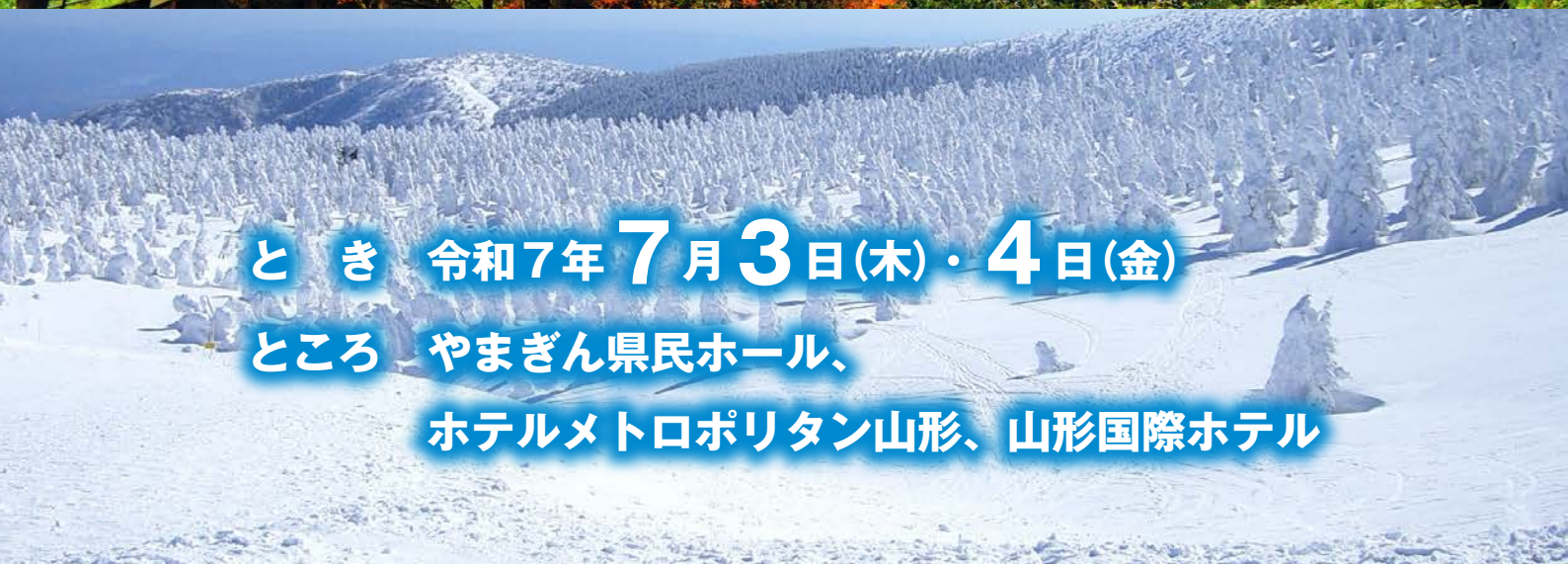




第75回 東北地区中学校長会研究協議会 山形大会報告書



と き 令和7年 7月 3日(木)・4日(金)

ところ やまぎん県民ホール、

ホテルメトロポリタン山形、山形国際ホテル

大会を振り返って

1日目



理 事 会



分科会運営委員会



開 会 式



開会宣言



大会会長あいさつ



山形市長祝辞



山形県教育委員会教育長祝辞



全日本中学校長会会長祝辞



受賞者代表挨拶



次期開催県代表挨拶



全日中報告



感謝状贈呈



閉会式

記念公演

演 題

「世界に挑戦して学んだこと」

～日本から見た世界、世界から見た日本～

講 師 元バスケットボール日本代表・バスケットボール指導者
WJBL トヨタ自動車アンテロープス HC

大 神 雄 子 氏



2日目

第1分科会



第2分科会





第3分科会



大会 スナップ



目 次

■大会を振り返って・大会スナップ

■大会主題・趣旨 2

■宣言・決議 3

■大会日程 4

■大会会長あいさつ

東北地区中学校長会会長 細 谷 直 樹（山形一中） 6

■祝 辞

山形県教育委員会教育長 須 貝 英 彦 様 7

山形市長 佐 藤 孝 弘 様 8

全日本中学校長会会長 青 海 正 様 9

■分科会報告

第1分科会 岩手県 小松山 浩 樹（渋民中） 12

山形県 横 井 真 人（朝日中） 12

第2分科会 秋田県 須 藤 孝 和（外旭川中） 14

青森県 佐々木原 淳（福地中） 15

第3分科会 福島県 早 川 貢（川谷中） 16

宮城県 村 上 秀 樹（上杉山中） 17

■次期開催県代表あいさつ

秋田県 大 山 裕（泉中） 18

■編集後記

第75回 東北地区中学校長会研究協議会

山 形 大 会

1 大会主題

「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」

2 趣 旨

現在、我が国では少子化・人口減少や高齢化、グローバル化の進展と国際的な地位の低下、地球規模の様々な問題、社会のつながりの希薄化などが社会的な課題として継続的に掲げられており、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字をとって「VUCA」の時代とも言われている。学校教育においても、学力や体力の向上、いじめや不登校生徒の増加への対応、部活動改革、教育DXや働き方改革の推進など、様々な対応が求められている。

こうした中、第4期教育振興基本計画では、2040年以降の社会を見据えた基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げている。両者は今後我が国が目指すべき社会及び個人の在り様として重要な概念であり、私たち校長は、これらの実現に向けて確かな理念の下に学校経営方針を立て、力強く学校経営を進めていかなければならない。

こうしたことを踏まえ、本研究協議会では、中学校教育の資質向上に資するとともに、広く国民の信託に応えるべく、研究主題として「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を掲げ、学校経営の更なる充実と学校からの教育改革に努めている。

本大会では、これまでの研究の成果を踏まえつつ、東北地区中学校長の英知と創造を集結して、主題に迫る具体的な方策を究明し、東北地区中学校教育の一層の充実・発展を期するものである。

3 主 催 東北地区中学校長会 山形県中学校長会

後 援 全日本中学校長会
山形県 山形市
山形県教育委員会 山形市教育委員会
山形県市町村教育委員会協議会

4 期 日

第1日 令和7年7月3日(木)
理事会 研究協議会開会式 全日中報告 記念講演 閉会行事
第2日 令和7年7月4日(金)
分科会別研究協議

5 会 場

やまぎん県民ホール(理事会 分科会運営委員会 開会式 全日中報告 記念講演)
ホテルメトロポリタン山形(第1分科会)
山形国際ホテル(第2・3分科会)

令和7年度 東北地区中学校長会 宣言・決議

宣 言

今日、我が国の教育は人格の完成を目指し、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされる持続可能な社会の創り手を育成する使命を担っている。

私たちは、自然災害や新たな感染症の発生、グローバル化の進展や急速な技術革新など社会状況が変化する中、新しい時代の中学校教育の課題に対応し、教育基本法をはじめとする教育関連法規や学習指導要領の趣旨を踏まえ、自らの責任において全日中新教育ビジョンに基づく学校からの教育改革を推進し、教育の価値を示さなければならない。

東北地区中学校長会は、教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、新たな中学校教育の創造を目指し、東北各県民の負託に応えていくことを宣言し、以下の事項を決議する。

決 議

一、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに「よりよい社会を形成する力」を育む教育を推進する。

一、全日中新教育ビジョンを踏まえ、学習指導要領に基づく特色ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、確かな学力の定着、豊かな心と健やかな体の育成を推進する。

一、現在の学校教育課題に即した研修を充実し、教職員の資質・能力の向上と使命感の高揚に努める。

一、創意ある教育活動を展開し、家庭・地域社会の信頼に応える教育を実現するため、人的措置をはじめ確固とした教育条件の整備・充実を期する。

一、「教科書無償給与制度」「義務教育国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を要請し、教育水準の維持向上を期する。

一、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮するとともに、「学校における働き方改革の推進」「教員の勤務実態を踏まえた環境整備」を要請し、有効かつ持続可能な指導・運営体制の構築を期する。

一、東日本大震災による津波や原子力発電所事故をはじめ近年多発する災害等により被害を受けた地域の復興を期し、教育活動の充実に向けた支援と東北各地区・各学校における防災教育・安全教育の一層の充実に努める。

令和7年7月3日
東北地区中学校長会

大会日程

【第1日：7月3日(木)】やまぎん県民ホール

11:30	12:20	12:50	13:20	13:30	14:20	14:50	15:05	16:35	16:45	18:00	20:00
分科会運営委員受付 理事受付	理 事 会 やまぎん県民ホール スタジオ1			開 会 式 理事会報告 宣言・決議	全日中 報 告	休 憩	講 演	閉会行事	各県情報交換会		
	分科会運営委員会 やまぎん県民ホール スタジオ2										
	一 般 会 員 受 付									やまぎん県民ホール 大ホール	
13:00											

(1) 理事会 2Fスタジオ1

- ・受 付……………11:30～12:20
- ・理事会……………12:20～13:20

(2) 分科会運営委員会 3Fスタジオ2

- ・受 付……………11:30～12:20
- ・分科会運営委員会……………12:50～13:20

(3) 一般会員受付……………13:00～13:30 2Fホワイエ

(4) 研究協議会開会式、理事会報告、宣言・決議……………13:30～14:20 大ホール

- ① 開会宣言
- ② 国歌斉唱
- ③ 大会会長挨拶
- ④ 祝 辞
- ⑤ 来賓紹介
- ⑥ 感謝状贈呈・受賞者代表挨拶
- ⑦ 閉式通告
- ⑧ 理事会報告、東北地区中学校長会宣言・決議

(5) 全日中報告……………14:20～14:50

(6) 記念講演……………15:05～16:35

演 題 「世界に挑戦して学んだこと～日本から見た世界、世界から見た日本～」

講 師 大 神 雄 子 氏

元バスケットボール日本代表／バスケットボール指導者

WJBLトヨタ自動車アンテロープスHC（R7.3月現在）

(7) 閉会行事……………16:35～16:45

- ① 御礼の挨拶
- ② 次期開催県代表挨拶

【第2日：7月4日(金)】

9:20 10:00

12:00

受 付	分科会別研究協議 ホテルメトロポリタン山形 山形国際ホテル
------------	--

分科会別研究協議

- ・受 付……………9:20～10:00 各分科会会場
- ・分科会別研究協議……………10:00～12:00 各分科会会場
- (分科会毎に解散)

分科会研究題	発表テーマ	県	発表者	司会者	会場
第1分科会	「主体的・対話的で深い学び」の実現	岩手	盛岡市立 渋民中学校 小松山浩樹	盛岡市立 城西中学校 大越 淳	ホテルメトロポリタン山形 4F「霞城」
	「主体的・対話的で深い学び」の実現 －生徒の自己有用感の高まりを目指し、地域を創る「総合的な学習の時間」の実践－	山形	朝日町立 朝日中学校 横井 真人	大江町立 大江中学校 志田 雅彦	
第2分科会	「カリキュラム・マネジメント」の推進	秋田	秋田市立 外旭川中学校 須藤 孝和	秋田市立 御所野学院中学校 沓澤 徹	山形国際ホテル 2F「平成」
	多様化した学校教育課題に対応できるミドルリーダーの育成を意識した学校経営	青森	南部町立 福地中学校 佐々木原淳	階上町立 階上中学校 平 和人	
第3分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現	福島	西郷村立 川谷中学校 早川 貢	塙町立 塙中学校 石田富加志	山形国際ホテル 3F「富士」
	学校運営協議会による地域との連携・協働 －地域の力を生かした児童・生徒の育成を目指して－	宮城	仙台市立 上杉山中学校 村上 秀樹	仙台市立 七郷中学校 木村 昌宏	



大会会長あいさつ

第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会会長

東北地区中学校長会会長 細谷直樹

初夏の山形を代表する特産品「さくらんぼ」が旬を迎えるこの時期に、東北6県の中学校長会会員の皆様を、ここ山形市にお迎えし、第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会を開催できますことに心より感謝申し上げますとともに、皆様を心から歓迎いたします。

また、本日は、ご多用中にもかかわらず、山形県教育委員会教育長 須貝 英彦 様、山形市長 佐藤 孝弘 様、全日本中学校長会会長 青海 正 様、山形県市町村教育委員会協議会会長 金沢 智也 様、前東北地区中学校長会副会長・前山形県中学校長会会長 小関 広明 様にご臨席賜りましたことに、厚く御礼申し上げます。

現代は、「VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）」の時代といわれており、近年はその言葉の通り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や国際情勢の不安定化、生成AIの登場等、予測困難な事象が次々と生じています。また、学校を取り巻く社会の変化の激しさは年々著しくなっており、働き方改革や部活動の地域移行など、以前のあたりまえが違う価値観へと転じたり、想定を超える災害や事故等が突如発生したり、更には、教育のデジタル化の加速度的進展など、まさに経験したことのない出来事が目の前で起きています。

これらの出来事に、私たち校長は、日々向き合い何が正解かわからない、あるいは見えづらい中、常に判断することを求められています。だからこそ、校長は、時代を見据え、未来に目を向け、幅広い視野を持って学校経営に取り組んでいかなければなりません。そんな我々にとって、東北各県の校長が一堂に会し、他県の取組や状況に直接触れ、意見交換ができるこの研究協議会は、視野を広げ、新たな考えを獲得できる、大変有意義な場であると考えます。

本大会の大会主題は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」です。この主題は、これまでの取組を土台としながらも、将来の予測が困難な時代において、自らが社会の創り手となるために必要な資質・能力を身に付け、様々な課題を解決しながら持続可能な社会を担っていく人材を育てていくという決意を込めたものです。また、明日開かれる3つの分科会では、「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラムマネジメント」の推進、学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現について、各県の発表をもとに協議されます。これらはどれも、ちょうど中間点を迎えた現行学習指導要領で大切にされてきたものであり、今ここでその取組をしっかりと検証することで、これから先に取り組んでいくべき方向が見えてくる、そんな分科会になればと考えております。

東北は自然豊かな魅力ある地域です。人情に厚く、温かな人のぬくもりは、多くの人をもてなす気持ちにつながっています。これまで東北各地の先人たちは、自然や風土との調和や一体感を大切に「まちづくり・地域づくり」に取り組み、その中で、その土地土地の文化や伝統、人々の生活を育んできました。これらを誇りに思い、あらためて「東北は一つ」という思いのもと、この大会が、これからの東北を担っていく子どもたちの育成に取り組んでいく、その決意を確かめることのできる大会になれば幸いです。

結びに、本大会の開催にあたり特段のご理解とご支援を賜りました全日本中学校長会、山形県、山形市、山形県教育委員会、山形市教育委員会、山形県市町村教育委員会協議会のほか、多くの関係機関、関係各位に深く感謝を申し上げ、挨拶いたします。



祝 辞

山形県教育委員会

教育長 須 貝 英 彦

本日は、第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会が、東北各県から多くの方の御参加のもと、盛大に開催されますことを、お喜び申し上げますとともに、心から皆様を歓迎申し上げます。

また、皆様におかれましては、日頃校長という重責を担う中で、リーダーシップを遺憾なく発揮され、「魅力ある学校経営」、「やりがいのある職場づくり」に御尽力いただいておりますことに、厚く敬意を表します。

今、グローバル化の進展や少子高齢化による人口減少、気象災害の激甚化・頻発化など、社会が大きく変化する中で、未来を生きる子どもたちを育成するため、学校においては、『主体的・対話的で深い学び』の実現、『カリキュラム・マネジメント』の推進、『学校と地域の連携・協働による『チーム学校』と『働き方改革』』といった課題に取り組まれていることと思います。

本県教育委員会においても、これらの状況を踏まえて、今年3月に、「第7次山形県教育振興計画」を策定したところです。この計画では、「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」を目標に掲げ、個人の幸せだけでなく、社会が幸せを感じられるよう、県民みんなが自分の力を活かして難しいことにも前向きに取り組み、熱意・楽しさ・生きがいを持って「挑戦（チャレンジ）」することを主眼にすえております。県内すべての中学校においても、計画の実現に向けた実践を重ねることで、確かな学力の育成など、教育のさらなる充実につなげてまいりたいと考えております。

本日の研究協議会において、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を主題に、学校経営や教育課題について東北地区の中学校長が一堂に会し、議論を深められることは大変意義深いことです。大会を通じまして見識を深められるとともに、その成果を各県での教育活動の充実に生かしていただきますよう御期待申し上げます。

さて、本県では、明治8年に政府からサクランボなどの果樹の苗木が配布され、県庁敷地に植えられて以来、今年で150年という節目を迎え、「やまがたフルーツ150周年」として、様々なキャンペーンを実施しております。サクランボのシーズンも終盤を迎えましたが、皆様には少々奮発して、お土産にお買い求めいただければ幸いです。また、本県は「ラーメン県そば王国やまがた」としても売り出し中です。この機会に、お気に入りの一杯を見つけてはいかがでしょうか。

結びとなりますが、本研究協議会山形大会の開催にあたり、準備や運営に御尽力をいただきました関係者の皆様に、心から感謝申し上げますとともに、東北地区中学校長会の御発展と、御参会の皆様様の益々の御活躍と御健勝を祈念いたしまして、御祝いの言葉とさせていただきます。



祝 辞

山形市長 佐藤 孝弘

本日、「第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会」が山形市において盛大に開催されますことは誠に喜ばしく、東北各地からお越しいただきました中学校長の皆様に心より歓迎申し上げます。

このたび、感謝状の贈呈を受けられる皆様におかれましては、長年にわたり、東北地区中学校長会の運営と、中学校教育の資質の向上にご尽力いただいたことに対し、深甚なる敬意と感謝の意を表します。

また、貴会の皆様におかれましては、感染症対策や熱中症対策等の子どもたちの安全確保と教育活動を両立し、誰もが安心して学べる環境を整え、効果的な学校運営を進めていただいていることに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、全国的に、急激な社会変化を背景とした、いじめや不登校の増加、急速に進むデジタル化やAIの登場などによる情報モラルの問題、多様性に係る対応や部活動改革等、子どもや学校を取り巻く環境は大きく変化しております。

こうした中、山形市におきましては、持続可能なまちづくりを目指し、未来を担う子どもたちの教育環境の質の向上を図るため、東北の政令・中核市に先駆け、電子黒板を小中学校全ての普通教室をはじめ、理科室、音楽室、体育館などの特別教室へ導入しております。また、個別最適な学習を提供する学習支援ソフトや特別支援教育ソフトを取り入れるなど、ICTを活用した教育の推進を図っております。

このような中、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を大会主題とし、本大会が山形市において開催されますことは大変意義深く、山形市が目指す教育理念と軌道を一にするものです。本大会を契機とし、各地域の中学校教育が躍進することをご期待申し上げます。

また、皆様をお迎えする山形市は、蔵王や山寺などの観光地はもとより、さくらんぼをはじめとする果物や山形牛、日本酒、そば・ラーメンなど、多彩な食文化もございますので、皆様には、この機会に山形市の魅力をご堪能いただきたいと思います。

結びに、東北地区中学校長会研究協議会のご盛会と、ご参会の皆様のますますのご活躍・ご健勝を祈念申し上げ、歓迎の挨拶といたします。



祝 辞

全日本中学校長会
会長 青海 正

本日ここに、第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会が、「四方を山で囲まれ、一年中美しい景観を堪能できる自然豊かな町」山形市におきまして、多くの参加者のもとで盛大に開催されますことに、心からお祝いを申し上げます。

これまで本大会の開催にあたり、準備を進めてこられました山形県中学校長会会長でいらっしゃいます細谷 直樹 様、本大会実行委員長でいらっしゃいます丹羽 英樹 様をはじめ、山形県中学校長会の皆様、そして東北地区中学校長会や関係の皆様のご努力に対し、心より敬意を表しますとともに、ご支援・ご指導を賜りました山形県並びに山形県教育委員会、山形市並びに山形市教育委員会の皆様をはじめ、多くの関係の皆様に深く感謝申し上げます。

ところで昨今、深刻さを増す少子・高齢化、混迷の度を増すグローバル情勢、気候変動に伴う自然災害の激甚化、生成AIなどデジタル技術の発展といった大きな変化とあいまって、社会や経済の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっています。これからの我が国を担う子供たちは、激しい変化が止まることのない時代を生きることになります。生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性が増しています。また、彼らは、将来日本国外に出て行く機会も増える一方、日本社会の内なるグローバル化が進展し、異なる価値観をもつ多様な他者と、当事者意識をもって対話を行い、問題を発見・解決できる、「持続可能な社会の創り手」とならなければなりません。

こうした中、全国の学校はGIGAスクール構想による一人一台端末環境も活用し、精力的な授業改善を行ってきました。世界に冠たる我が国の教育は、質の高い教師の努力と熱意に支えられ、大きな成果を上げ続けています。

一方、デジタル学習基盤は大きな可能性を秘めていますが、その効果的な活用は緒（しょ）に就いたばかりです。「デジタルキャリアか」、「デジタルか紙か」といった二項対立に陥らず、「デジタルの力でリアルな学びを支える」との基本的な考えに立ち、バランス感覚をもって、積極的に取り組む必要があります。枚挙にいとまがない中学校教育をめぐる諸課題に対しても果敢に挑戦し、校長相互の資質向上と、目的を明確にした研究を推進することにより、学校経営の更なる充実と、学校からの教育改革を進める必要があります。

学校は子供たちと未来を語り合える場所であり、教師は人を育てる最高の職業です。私たちが抜け出せなくなるほど夢中になった教師の仕事がいかに魅力的なのかを積極的に発信し、現状に疑問をもち改善に向けて行動することを大切に、原点回帰、初心に立ち返り、会員相互の英知を結集して、これからも全日中の責務を果たしてまいりましょう。

結びになりますが、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」の大会主題の下、全体会や各分科会において活発な議論が展開されることをご期待申し上げますとともに、東北地区の中学校長会が、これからはますます充実・発展されますこと、そして会員お一人お一人のさらなるご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

分科会報告



〔第1分科会〕

研究題「主体的・対話的で深い学び」の実現

発表者 小松山 浩 樹（岩手：渋民中）
横 井 真 人（山形：朝日中）
司会者 大 越 淳（岩手：城西中）
志 田 雅 彦（山形：大江中）
進 行 早 坂 智（山形：葉山中）
記録者 竹 内 斉（山形：東根第三中）
運営者 鈴 木 和 典（山形：福原中）

〔発表1〕

確かな学力の育成を図る学校経営のあり方
～「主体的・対話的」で深い学びを通して確
かな学力の育成を図る学校体制や取組に関す
る研究～

岩手県盛岡市立渋民中学校 小松山 浩樹

Ⅰ はじめに

現代社会はVUCA（変動性・不確実性・複雑性・曖昧性）の時代を迎えており、将来予測が困難ななかで、教育には「確かな学力」とともに「主体的・対話的で深い学び」の導入が強く求められている。

岩手県では東日本大震災の経験を経て「いわての復興教育」が教育の柱に据えられ、郷土愛と社会貢献を志す人材育成に取り組んできた。盛岡市もこの方針に基づき、市内校長会が連携して、知・徳・体のバランスのとれた教育を目指している。

Ⅱ 研究の概要

1 研究の目的

- (1) 生徒が「生きて働く力＝確かな学力」を身につけるために、授業改善・学校経営のあり方を検討する。
- (2) 各校の実践を通じて、校長としてのリーダーシップの在り方を考察する。

2 研究の内容と留意点

(1) 主な視点

- ① 単なる理論優先ではなく、生徒の現状（学習・生活・人間関係）を尊重した研究とすること。
- ② 授業改善は目的ではなく手段であり、「育てたい力」を明確にすること。
- ③ 各校の確かな学力育成プランやいわての授業づくり3つの視点に基づく実践の積み重ね。

(2) 重視された共有事項

- ① 実践交流による成功事例や課題の把握
- ② 授業公開や校内研究資料の蓄積と活用
- ③ 校長の果たすべき役割の明文化と共有

3 各校の主な成果＝①と、主な実践事例＝②

(1) 下橋中学校

- ① 自己肯定感が3年間で+9.9%
- ② 生徒の疑問から始まる課題設定を重視し、対話的な授業へ

(2) 黒石野中学校

- ① 自己肯定感が1年間で+16%

- ② 協同的探究学習を軸に、「できる学力」と「わかる学力」の両立

(3) 見前南中学校

- ① 思考の深化（自己表現）+3%
- ② 「F.B.C.A.F.学習法」で課題設定から振り返りまでを体系化

(4) 乙部中学校

- ① 自己評価と自己受容の向上
- ② 成長の5項目（主体性・社会性等）を育てる教育活動と学習過程を明示

(5) 渋民中学校

- ① 読解力・社会への関心の向上
- ② 「+日報」による新聞記事活用で情報活用能力を養成

Ⅲ 研究の成果と校長の役割に関する考察

1 研究の成果

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の方向性を共有できたこと
- (2) 公開授業や研究大会参加を通して、教職員の研鑽が深まったこと
- (3) 校長間の交流で互いの実践を学び合い、学校経営に活かす視点が得られたこと

2 校長の役割に関する考察

- (1) 学校の実情に応じたカリマネの推進
- (2) 学力向上プランの明示と職員への共有
- (3) 研究主任や研究組織の支援と強化
- (4) 校内研修などで教職員の自己有用感を高める働きかけ
- (5) 教職員の業務効率化を図ることで、教材研究や校内研修に時間とエネルギーを確保し、指導と連携の質を高めること

〔研究協議〕

尾崎（青森・深浦中）生徒の生きる力に自己肯定感等で検証していた理由は何か。

小松山（岩手・渋民中）東日本大震災で学んだ教訓を教育に落とし込むことを意図している。今回の研究テーマも最終的に生きる力につなげていきたいという思いがある。過去から学び、今を見つめ、自分事として未来を創る子どもたちを育てていくことを目指している。

新井野（岩手・北上中）読解力・情報活用能力をつけるための「+日報」の取り組みを行っているそうだが、教科等でどう活用しているのか。

小松山（岩手・渋民中）各教科の動機付けや深め学習に活用している。記事の内容から深め、広げることができる。新聞編集のページの活用も支援学級の生徒の学びに有効であった。

〔発表2〕

「主体的・対話的で深い学び」の実現
～生徒の自己有用感の高まりを目指し、
地域を創る「総合的な学習の時間」の実践～
山形県朝日町立朝日中学校 横井 真人

I はじめに

西村山地区（寒河江市・河北町・西川町・朝日町・大江町）は、人口減少と高齢化が進み、多くの町が「2050年までに消滅可能性がある自治体」と指摘された。教育現場では、未来の地域を支える若者を育てることが喫緊の課題である。中学校の学力・意識調査では、生徒の「自己有用感（自分が誰かの役に立っているという感覚）」が全国平均を下回る学校が多いことが、本研究の出発点となった。

II 研究の概要

1 研究の目的・方向性

地域に密着した「総合的な学習の時間」を活用し、「ふるさと」への誇りや愛着を持ち、将来地域に貢献しようとする生徒を育てることを目指す。

2 研究の2つの視点

- (1) 地域資源（モノ・ひと・こと）を活かした郷土愛を育む学習活動の在り方
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習活動の在り方

3 実践の中核：「朝日中学校の取り組み」

(1) スキマクラス2.5組

教室×企業のコラボ 空き教室を、地域企業（まよひが企画）のサテライトオフィスとして提供。生徒は「働く大人」と日常的に関わることで、将来の仕事や社会への視野を自然と広げる。企業側も「総合的な学習の時間」などで学校活動に協力する。

(2) 修学旅行×朝日町PR（3年生）

東京・早稲田商店街で、地元特産品を生徒自らが販売。ゆるキャラやPR教材を活用して観光客を誘致することに成功。売上記録を更新した。地域を代表して何かを伝える経験が、自己肯定感の向上につながった。

(3) 「町を知るゲーム授業」（1年生）

朝日町エコミュージアム協会が制作したカルタやパズルを活用。地域の地理・文化を楽しみながら学び、郷土理解を深めた。

(4) 「缶バッチ制作×PR活動」（2年生）

職場体験をした企業のオリジナル缶バッチを制作。町の文化祭で展示し、地域との接点を増やすとともに表現力を育成した。

III 研究の成果と課題等

1 成果

- (1) 「ふるさとを知る・伝える・愛する」という過程から地域への誇りと帰属意識が高まり、社会の一員としての自覚が芽生えた生徒も多く、成長を実感できた。
- (2) 企業や地域との協働により、生徒の学習が“本物”に近づき、やりがいや意義を実感できた。
- (3) 地域コーディネーターと学校の連携により、学校の意図がスムーズに伝わり、研究実践の質が向上した。

2 課題

- (1) 生徒にとって「なぜこの学びが必要か」という納得感が必ずしも得られていない場面もあった。主体性を引き出すには、さらに柔軟で魅力的な設計が求められる。
- (2) 生徒の経験値が浅いため、思考や発想の幅をどう広げるかが鍵となる。企画が行政や教員主導になりがち側面もあり、生徒が前面に出る工夫が必要である。

3 校長の役割と今後の方向性

- (1) 地域企業への丁寧な感謝表明（手紙だけでなく、直接訪問や交流）を行い、地域との信頼関係を深めていくこと。
- (2) 他校との情報共有によって各校の取り組みを磨き合い、発展的な教育の構築を目指す。その際に、地域性に応じた柔軟な実践を重視しつつ、外部評価や助言を積極的に受け入れていく姿勢が必要である。
- (3) 校長が自ら地域とつながることで、「開かれた学校づくり」の一助としていくこと。

4 終わりに

本地区の生徒は素直で真面目だが、裏を返せば、受動的にもなりやすいという課題がある。その特性を踏まえ、地域とのリアルなつながりを通して“主体的に行動する力”を育てていくことが目標となる。学校間で実践を共有し、地域を支える次世代を育てていくことで、ふるさとに誇りを持ち、協働できる「地域創造人材」の育成を目指していく。

〔 研 究 協 議 〕

平塚（宮城・湊中）故郷に愛着を育てる教育の大切さを感じているが、校長として行政とどのような橋渡しをしてきたのか。また学びとしてどう成立させることを意識してきたのか。

横井（山形・朝日中）学校運営協議会に教育委員会のメンバーもあり、協力を得て事業を進めてきた。学びの必要感については学校教育目標に故郷を大切にする内容があり、その実現のための活動であることを伝えている。

高橋（岩手・釜石東中）民間企業が学校に入ってきた経緯と、企業としての収益はどうか。

横井（山形・朝日中）もともと学校運営協議会の委員の企業であり、承認を得て空き教室をオフィスとして無料で使用する代わりに学校の教職員へのサポートを無料でしてもらうことでウインウインの関係を得ている。地域振興の企業として、利益は独自に上げている。

石黒（山形・遊佐中）遊佐中も地域を生かす総合に取り組んでいる。総合を核として学力の向上や授業改善につながった事例はあるか。

横井（山形・朝日中）本実践は学校教育目標の実現をめざしてきた。今年度以降は、総合を練習の場として、見える学力の向上に取り組んでいく。

〔第2分科会〕

研究題「カリキュラム・マネジメント」の推進

発表者 須藤 孝和（秋田：外旭川中）
佐々木原 淳（青森：福地中）
司会者 杳 澤 徹（秋田：御所野学院中）
平 和 人（青森：階上中）
進行 鈴木 千宏（山形：東根第一中）
記録者 菅 野 寛（山形：大富中）
運営者 長 岡 篤 志（山形：神町中）

〔発表1〕

カリキュラム・マネジメントの実効性を
高めるための校長のリーダーシップ

秋田県秋田市立外旭川中学校 須藤 孝和

Ⅰ はじめに

秋田市では、少子化に伴う中学校の統廃合が進む中、教育活動の質的向上が喫緊の課題である。特に、教科横断的な学びや探究を通じて、生徒の主体性、社会性、問題解決能力の育成が求められている。学習指導要領で定義されるカリキュラム・マネジメントは教育活動の質向上に不可欠であり、本市校長会は表題をテーマに3年間共同研究を行ってきた。

Ⅱ 研究の概要

本研究は、大阪教育大学・田村知子教授のカリキュラムマネジメント・モデルを採用し、校長のリーダーシップを中心に据え、教育活動の質的改善を目指した。ねらいは、教職員の協働性向上と組織力強化、カリキュラム・マネジメントの実効性向上である。3年間の計画で、初年度のチェックリストによる実態把握では「教育目標の具現化」は高評価だが、「マネジメントサイクル（PDCA）」の不十分さが課題として明らかになった。

Ⅲ 研究の実践

カリキュラム・マネジメントの実効性を高めるため、各校で「組織力の向上」「協働体制の構築」を共通テーマとした。具体的には、教育目標・課題の共有、教職員の力量形成方策の明確化、立場や役割に応じたリーダーシップを発揮しやすい職場づくり、目指す教育活動に必要な組織体制づくり、教職員個々の実践のよさや成果の共有化、教職員間のコミュニケーションの活性化、教育課程全体で生徒を育てていくという意識の醸成といった視点から実践を展開した。

Ⅳ 成果と課題

【成果】2年間の実践により、校長がPDCAサイクル構築に手応えを感じていることが分かった。また、校長による教職員間の対話・協力の

促進が、学校文化の再構築に繋がったと実感されている。

【課題】年度替わりの異動による人員構成変化が「組織構造」や「学校文化」の評価低下に影響しており、教職員の入れ替わりに左右されない継続的な経営方針の共有と体制維持の方策が求められる。

Ⅴ 検証と考察

職員アンケートでカリキュラム・マネジメントの実践に関する客観的評価を得た結果、高評価だった上位6校の校長の行動を分析した。上位校の校長は、「同歩調の指導体制」「校長通信による伝達」「職員との日常的関わり」「家庭や地域との連携」で高い評価を得ており、特に「承認と称揚」が際立っていた。これは、日常的な関わりと実践への承認・称揚が、教職員の参画意識を高め、カリキュラム・マネジメントの実効性に不可欠であることを示唆している。総括として、上位校の校長は文化的リーダーシップに優れ、これが教職員の参画意識を高め、心理的安全性を確保し、自由な意見交換と挑戦的な実践を後押ししていると考えられる。

Ⅵ おわりに

本研究を通し、校長のリーダーシップがカリキュラム・マネジメントの実効性向上に大きく寄与することが再認識された。特に「教育目標の明確化」「組織的な共有体制の構築」「日常的な関わりを通じた信頼関係の醸成」が教職員の協働と主体性を高める鍵である。今後は、これらの成果を土台に、教育課程の個別最適化や多様な学びへの対応といった新たな課題に取り組む必要がある。また、異動に左右されない継続可能なカリキュラム・マネジメント推進体制と学校文化の構築が必要である。

〔研究協議〕

遠山 秀樹（岩手・住田中）PDCAサイクルでPは活性化されるがC・Aが弱くなるといわれるが、校長としてどんな取り組みをしているか。→須藤 孝和（秋田・外旭川中）職員会議等の会議の中で、達成状況の振り返りを行い、成果や課題から改善策を話し合うことが有効だった。

松本 涼一（福島・檜葉中）学校規模や校長の経験年数の違いで気づいたことはあるか。→石塚 昭仁（秋田・飯島中）上位6校のうち規模が大きい学校が3校、小さい学校は3校で同じで、校長の経験年数はいずれも長かった。校長同士の研修を重ねることで、知見を高めることができる。

〔発表2〕

多様化した学校教育課題に対応できる
ミドルリーダーの育成を意識した学校経営
青森県南部町立福地中学校 佐々木原 淳

Ⅰ はじめに

三戸郡の中学校は少子化による小規模化が進み、教職員の減少と経験年数の不均衡が顕著なため、ミドルリーダーの育成が喫緊の課題である。本研究は、この課題解決のため、実態把握と実践事例の共有を通じて、「カリキュラム・マネジメントの推進」を視野に入れながら、表題について研究を行ってきた。

Ⅱ 研究の概要

1 研究目標

アンケート調査でミドルリーダー育成の現状を把握し、実践事例を共有することで、求められる資質・能力を高める有効な手段を明らかにし、学校経営に貢献することを目指す。

2 研究仮説

アンケート調査と実践事例の共有、有効な手段の実践を通じて、必要な資質・能力を備えたミドルリーダーが育ち、カリキュラム・マネジメントが推進され、学校経営の充実・改善に繋がるという仮説を立てた。

Ⅲ 研究内容及び方法

1 アンケート調査の実施による実態把握

1・2年次で教職員の人数・年齢構成、ミドルリーダー育成上の問題点などに関するアンケート調査を実施し、現状を把握した。

2 実践事例の収集と共有（3年次）

校長対象のアンケートを通じて、ミドルリーダーが抱える課題解決に向けた実践事例を収集・共有し、校長会研修も実施した。

3 評価と共通実践（4年次）

分掌主任へのアンケートで実践事例の有効性を評価・検証し、ミドルリーダー育成を目的とした資料を用いた研修も行った。

Ⅳ 研究の実践

1 2年次の研究の概要（アンケート調査結果）

教職員の年齢構成は、50代が最多で、平均年齢も高めだった。育成上の課題として「年齢構成の偏り」「多忙化」「意欲の問題」などが挙げられた。主任たちは「経験不足・能力不足」「協働体制の構築」「多忙化」に困難を感じていた。

2 2年次の研究の分析

ミドルリーダーの年齢層が高いことから、現在のミドルリーダー育成が現実的であると判明した。育成には「研修の充実」「経験を積

ませること」「人間力の育成」が重要と認識されているが、「年齢構成」「多忙化」「意欲」が課題となっている。

3 3・4年次の研究の概要

3年次には実践事例を収集・共有し、ミドルリーダー育成の具体策について知見を得た。4年次には主任を対象に実践事例の有効性を評価・検証し、特に有効と考えられた取り組みを特定した。これには、組織編成の工夫、経営方針の明確な伝達、ミドルリーダーの「やってみたい」を吸い上げる工夫、多忙化解消の取り組みなどがある。

4 3・4年次の研究の分析

主任が有効と考える校長の取り組みは、「校長へ話し掛けやすい雰囲気作り」「経営方針の明確な伝達」「分かりやすい経営方針と裁量付与」「主任の『やってみたい』への助言」である。主任が管理職との密なコミュニケーションを重視していることが示唆された。一方で、校長による「頑張りに対する評価フィードバック」の評価は低い傾向にある。

Ⅴ 成果と課題

本研究の大きな成果は、今後のミドルリーダー育成に向けた取り組みの方向性を示唆する分析結果を得られたことである。カリキュラム・マネジメントの推進にはミドルリーダーの育成が有効であることが確認された。今後は、教育課程に基づいた組織的・計画的な教育活動の質向上を図ることが課題である。

Ⅵ まとめ

カリキュラム・マネジメントの推進にはミドルリーダーの育成が有効であることが分かった。今後も「主任の『やってみたいこと』を実現するための助言」「意欲向上を意識した声掛け」「働き方改革」に取り組み、ミドルリーダーの育成を推進していきたい。

〔研究協議〕

土井 正路（山形・山形九中）各校の実践の共有はどのように行っていたのか。また、実践事例の中で地域行事との関連が多かったが、総合的な学習を核とした実践なのか、行事での実践なのか。→佐々木原 淳（青森・福地中）アンケート結果や実践事例についてはすべて各学校に報告している。紹介した実践事例は、総合の一環として行ったものもあれば、地域行事として参加したものもある。カリキュラム・マネジメントの3つ目の視点である「人的又は物的体制の確保と改善」に焦点を当てた実践である。

〔第3分科会〕

研究題 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

発表者 早川 貢（福島：川谷中）

村上 秀樹（宮城：上杉山中）

司会者 石田 富加志（福島：塙中）

木村 昌宏（宮城：七郷中）

進行 工藤 雅史（山形：尾花沢中）

記録者 安達 卓子（山形：大石田中）

運営者 加藤 淳一（山形：楯岡中）

〔発表1〕

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

～多様な人材の専門性を生かして～

福島県西郷村立川谷中学校 早川 貢

Ⅰ はじめに

現在、学校には教職員以外の専門スタッフの配置が進められており、組織的な課題解決のため、教職員が専門スタッフと協働し、それぞれの専門性を生かすことができる「チーム学校」の構築が求められるようになった。また、コミュニティ・スクール等の活用による連携体制を整備し、地域とともにある学校づくりを推進していくことも求められる。これらを踏まえ、校長としてどのように教員の「働き方改革」の実現を図ることができるかを明らかにするために研究実践を推進した。

Ⅱ 研究の概要

1 研究の方向

校長は「チーム学校」の実現のため、多様な知識・経験をもつ人材との連携を強化し、組織マネジメントを進めている。各学校の実践事例を集約し、研究の共有化に役立てる。

2 研究の視点

視点1 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方

視点2 チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方

視点3 専門スタッフ等との連携による教員の働き方改革の実現

Ⅲ 研究の方法

1 研究の視点に沿って研究実践を進め、校長としての関わりを明確にする。

2 各校の実践事例を基に課題を明確にするとともに、成果や課題を共有する。

3 成果や課題を踏まえ、研究実践計画を修正し、さらなる実践を積み重ねる。

Ⅳ 研究の実践

1 視点1

(1) 多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める取組

(2) 地域サポーターを活用し、学校と地域を繋ぐ持続性のある取組

2 視点2

(1) 地域学校協働活動事業を活用した取組

(2) コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を目指した取組

(3) 地域を素材にした新たな学習活動を活用した取組

3 視点3

(1) 多様な人材を活用し、教員の負担を軽減した取組

Ⅴ 成果と課題

1 成果

(1) 専門スタッフの導入について

組織の一員として専門スタッフを位置づけ、教育課程の中に計画的に組み込むことで、教職員が専門スタッフと協働し、それぞれの専門性を生かすことができる「チーム学校」と「働き方改革」を実現することができた。

(2) 地域との連携・協働について

教育課程の改革を進めたことで、地域との連携・協働を推進することができた。教育委員会と一体となってコミュニティ・スクールを進めたことで、学校だけではできない予算を伴う対応を行っている情報等を共有することができた。

2 課題

多様な人材の専門性を活用し、組織力を高めたり、地域との連携・協働体制づくりを進めたりするには、地域に根ざした人材の確保が何より必要である。学校現場に採用された人材の活用は校長がリーダーシップを発揮し、校務分掌や教育課程の見直しなどを推進していくことが必要である。

〔研究協議〕

岸 健一郎（青森・田名部中）職場体験について、事業所との連絡や当日の見守りも地域の方が行うことに至るまでどのような経緯だったか。

早川 貢（福島・川谷中）地域コーディネーターに相談し、商工会にも依頼して協力事業所のリストアップを行ってもらった。結果、生徒の希望とのマッチングの後の連絡調整も地域コーディネーターによるところとなった。

〔発表2〕

学校運営協議会による地域との連携・協働
～地域の力を生かした

児童・生徒の育成を目指して～
宮城県仙台市立上杉山中学校 村上 秀樹

Ⅰ はじめに

仙台市では、「仙台市教育構想2021」(教育構想)を策定し、「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てる」ことを基本理念としている。さらに、「学校」「家庭」「地域」「仙台市・仙台市教育委員会」の各主体が子どもの教育や生涯の学びについてその役割を意識し、地域社会の中で協働し支え合いながら取り組むこととしている。

Ⅱ 研究の概要

1 研究のねらい

仙台市では、学校運営協議会を「仙台版コミュニティ・スクール」として導入。学校・地域・家庭の三者が「どのような子どもたちを育てたいのか」「何を実現したいのか」という目標やビジョンなどを共有し、連携・協働して各種の取組を進めていくことで、「学校を核とした地域づくり」へとつながっていくことが期待されている。学校運営協議会を軸にした学校運営の在り方を探るとともに、校長としての学校経営の力量を高め、「地域とともに歩む学校づくり」に向けた教育の充実を期するため、本主題を設定した。

2 研究の視点

- (1) 学校運営協議会の設置形態
- (2) 学校運営協議会委員以外の参加
- (3) 学校運営協議会の運営主体
- (4) 学校運営協議会の実施回数
- (5) 熟議の実施状況
- (6) 地域への依頼や協力が必要になった場合の窓口

Ⅲ 研究の方法

1 アンケート調査(66校、各視点について)

- (1) 単独設置53%、1中1小で設置35%
- (2) 委員以外は参加しない協議会が36%
- (3) 運営が学校主体85.7%、委員主体10.0%
- (4) 年3回実施の協議会が6割弱
- (5) 令和6年度は62協議会で熟議を実施予定
- (6) 学校支援地域本部スーパーバイザー7割

2 仙台市中学校長会研究協議会

研究テーマ「学校運営協議会による地域との連携・協働」

- (1) パネルディスカッション
- (2) グループ協議

Ⅳ 事例の内容

○実践例1【仙台市立沖野中学校】

「学びの連携モデル事業」の指定を起点に、「おきの学園学校運営協議会」を設置し、活動に取り組んでいる。

○実践例2【仙台市立加茂中学校】

学校と地域住民・団体・企業等が協働することで子どもたちに地域総ぐるみの教育を提供できる環境づくりを目指して活動している。

○実践例3【仙台市立折立中学校】

地域行事における生徒の活躍の場を充実させることにより、生徒が自己有用感を高められるようにすることをねらいとしている。

○実践例4【仙台市立上杉山中学校】

「地域で育てる子ども像」の共有を図るとともに、顔の見える関係を構築し、地域の中の学校を意識した学校運営及び小中連携の推進、並びに地域の活性化につなげることをねらいとした取組を進めている。

Ⅴ 成果と課題

1 成果

それぞれの地域の状況に応じた方法や内容で、学校運営協議会を通して地域との連携・協働に取り組んでいることを改めて実感することができた。他校の事例を参考としながら、自校の教育活動を検討する機会となった。

2 課題

コミュニティ・スクールを行うことが目的にならないよう意識するとともに、子どもの自立や成長に向けて、学校や地域、家庭がどうあるべきか考えることが大切であることを再認識する機会となった。

〔研究協議〕

高橋 清隆(秋田・湯沢南中) 学校運営協議会の取組や頑張りがなかなか教員に届かない。教頭や教務の関わりにより改善しているが、学校全体に浸透させるにどうすべきか。

村上 秀樹(宮城・上杉山中) オブザーバー参加可として、熟議に教員や生徒が参加している例がある。学校運営協議会に関するシートを作成し、職員に配付して理解を深めてもらった。

角谷 隆章(岩手・柴波第三中) 会議の時間帯、年度初めの学校運営への意見・承認、CSコーディネーターについて、状況はどうか。

村上 秀樹(宮城・上杉山中) 会議は勤務時間内が多いが、1回目を夕方実施という場合もある。学校運営方針の承認は前年度末に行い、新年度は修正程度。仙台市ではCSアドバイザーもいて、学校を訪問し相談に応じている。

次期開催県代表あいさつ



秋田県中学校長会
会長 大 山 裕

第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会の開催にあたり、大会の企画や運営に尽力されている山形県中学校長会の会員の皆様に対し、心から敬意を表するとともに、おもてなしの心で東北各県の会員をお迎えいただいたことに対し、東北地区の会員を代表して厚く御礼申し上げます。山形県中学校長会の皆様におかれましては、自校の学校経営に加え、本大会の準備のための取組も重なり、大変なご苦労があったものと推察いたします。秋田県中学校長会におきましても、この山形大会を参考にしつつ、秋田ならではの大会にできるよう張り切って準備を進めてまいりたいと考えているところです。

現在、県中学校長会の中に委員会を立ち上げ、準備を進めている第76回東北地区中学校長会研究協議会秋田大会は、令和8年7月2日・3日の二日間、秋田の文化・芸術の創造の新たな拠点として、2022年6月に開館した「あきた芸術劇場ミルハス」を会場に開催される運びとなりました。

さて、現在も、この先の未来も、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性などの言葉に象徴される予測困難な時代と言われており、国民一人一人にとって豊かで幸せな人生と、社会の持続的な発展を実現する上で、学校教育の果たす役割はますます大きくなるものと認識しております。

こうした中、中央教育審議会答申において示された「令和の日本型学校教育」の構築を目指した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や、第4期教育振興基本計画で示された「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」の実現に向けて、私たち校長は、確かな理念の下に方針を立て、力強く学校経営を進めていかなければならないと捉えています。

これらのことを踏まえ、秋田大会では、学校における働き方改革を含めた新たな教育課題に対して果敢に挑戦し、中学校教育の更なる向上を目指すとともに、広く国民の負託に応えるべく、令和8年10月に開催される全日中長野大会の研究の方向を踏まえ、大会主題として「『豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会を創る担い手』を育てる中学校教育」を掲げ、学校経営の更なる充実と、学校からの教育改革の方向について広く発信したいと考えているところです。

7月の秋田は、梅雨のうっとおしさが抜けきらない季節ではありますが、秋田ならではの豊かな自然、歴史や文化に加え、季節の花々やふるさと秋田自慢の郷土料理もご堪能いただければ幸いに存じます。

結びに、山形大会の成功を心からお祝い申し上げますとともに、東北地区の子どもたちの明るい笑顔と健やかな成長のため、今後も、「東北は一つ」という思いを共有し、東北地区中学校長会の横のつながりを大切にしながら、各県・各校の取組の更なる充実を図ることができるようご祈念申し上げ、次期開催県を代表してのあいさつとします。

それでは、令和8年7月2日、秋田市で皆様のお越しをお待ちしております。

編集後記

近年の夏は酷暑が当たり前のようになり、今年も最高気温記録が更新されるなど、暑さの大変厳しい夏でした。9月に入り、朝晩窓を開けると入り込む風や時折聞こえる虫の声によりやうく涼しさを感じられるようになりました。東北地区中学校長会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

去る7月3日・4日の2日間にわたって開催しました「第75回東北地区中学校長会研究協議会山形大会」では、東北各地から700名近くの会員の皆様から遠路、「ラーメン県そば王国山形」までお越しいただき、熱心に御協議いただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、東北各県の関係者の皆様には、お忙しい中、あいさつや発表のご準備をいただくとともに、大会誌や分科会データ等のやり取り及び分科会当日の発表・司会等に全面的にご協力いただきありがとうございました。

前回の山形大会は、平成30年6月下旬に同じ山形市で開催されました。当時と比較すると、少子化の影響により生徒数・学校数は減少しています。そして、前回大会の準備に携わった諸先輩方がすでに本会の会員を引退されている中、当時の紙面を頼りに「持続可能且つ充実した大会」となるよう、山形県中学校長会が心を込めて準備を進めてまいりました。運営細部に至りましては、まだまだ不行き届きの面があったかと思いますが、何卒ご容赦願いたいと存じます。しかしながら、私個人として、学校が抱える喫緊の課題解決に向け、会員の皆様が一堂に会し、顔を突き合わせて協議することの素晴らしさ、そして同じ校長として悩みや学校経営のアイデア・実践を共有できることの頼もしさを感じました。そして、東北地区中学校長会の「絆と結束力」を改めて感じました。ご参会の皆様も同じ気持ちだったのではないのでしょうか。

終わりになりますが、東北地区中学校長会会員の皆様の一層のご活躍とご健勝をお祈り申し上げるとともに、次年度東北地区中学校長会研究協議会秋田大会のご盛会を祈念申し上げます。

山形大会実行委員会
大会運営委員会 研究部長
鈴木 和 典（尾花沢市立福原中学校）

第75回 東北地区中学校長会研究協議会 山形大会報告書

令和7年10月1日発行

編 集 第75回東北地区中学校長会研究協議会
山形大会実行委員会

印 刷 株式会社 大風印刷
〒990-2338 山形市蔵王松ヶ丘一丁目2-6
TEL 023-689-1111

